

横浜大空襲 その1

永井 藤樹

まえがき

『人間学研究会』は、今年度 機関誌『せせらぎ 20号』を発刊しました。

折しも今年は、横浜開港150周年の節目の年に当たり、期せずして『せせらぎ』も発刊20回目という節目のよい回数と重なりましたので『横浜開港150周年記念特集号』として発刊することが総会で決定しました。

この編集主旨に沿って私は『横浜大空襲』の状況を調査し纏めたものを投稿しました。

その後、以前から同窓会のホームページの管理責任者からホームページへの投稿を依頼されていることでもあるので、その要請に答えるため原稿を見直し、『せせらぎ』では紙面の制約から省略せざるを得なかった部分を大幅に加筆、内容にも手を加え、写真等も掲載し『せせらぎ』とは若干異なった視点も加え充実を図りました。

本論文は『せせらぎ編集委員会』のご了解を戴いた上で掲載をいたします。

本 論

横浜に住まいを構えてから、35年余がたちますが、まとめてお聞かせできるような話は残念ながらありません。しかし、昨年8月に発刊された「せせらぎ19号」に五百旗頭 真（いおきべ まこと）先生の説に基づいて論考した「回避された京都への原爆投下」を投稿し、その中で「横浜は原爆投下候補地になっていたが『昭和20年5月29日』の大空襲をうけたので候補地から外された」と書きました。そして、この原稿を書いたことを契機に『横浜大空襲』の実態を知りたいと思うようになり、今だ調査途上ではありますが、いくらか分かりかけてきましたので、今回 纏めてみました。調査に使用した主な文献は『横浜市史』、今井清一『大空襲5月29日』有隣堂発行などです。インターネットも活用しました。なお、マスコミ方面からの情報を得ようと「神奈川新聞」を調べましたら5月28日までは発行されていますが、翌29日からの新聞は不明で、地元紙からの情報は得られませんでした。

当時 神奈川新聞社は南区宮元町の疎開工場で新聞輪転機を稼働させていま

したが、軍需産業への電力供給が優先され操業もままならない上に、その後の空襲によりまったく機能不全に陥り、事業再開は昭和20年11月7日からで、5カ月以上発行できなかつたということです。それでも情報産業に携わる地元新聞社として29日すぐさま手回し輪転機で『県民に告ぐ』と銘打って号外を発行したそうですが極度の混乱の中、その資料をも見失ってしまったといひます。もっとも軍による情報統制の厳しかつた戦時中のことですから、新聞が真実を伝えることはできなかつたと思ひます。また『朝日新聞』もなぜか昭和20年初頭から一面がなく、殆どが二面からの発行で、『空襲』直後の5月29、30、31日の紙面に『横浜大空襲』については何も触れられていない。その後も同様です。一方NHK横浜は当時地方放送局としての取材・営業活動をしていなく、開局は昭和26年7月からということなので、この方面からの情報入手もできませんでした。

昭和20年(1945)5月29日朝9時22分から同10時30分までの1時間にわたつて、横浜市はB29の空襲をうけ、市中心部18平方キロ(市の44%)が焼き尽くされ灰燼に帰した。マリアナ基地を発進し、硫黄島を経て北上し、静岡県御前崎から本土に進入したB29の517機は富士山上空に集結した後、硫黄島基地から出動したP51護衛戦闘機(Mustang) 101機の到着を待ちこれと合流して、ここからまっすぐに横浜に向かい、割り当てられた市域を襲つた。

それまでの空襲はB29爆撃機単独編隊のものであつた。『横浜大空襲』からが戦闘機に護衛させた戦爆連合編隊に戦術変更した最初の空襲であつた。(余談ですが御前崎は私が三浦市から疎開し5歳まで住んだ漁港で、駿河湾の入口に当たります。三浦半島も御前崎も米軍機本土進入の道標になっていました。)

横浜に対する攻撃方法は、昼間爆撃の典型であつた。理由は5月23日、25日の東京に対する夜間低空飛行爆撃で、米軍が受けた損害が予想外に大きかつたので、谷戸や丘陵地帯が多く複雑な地形から成る横浜の主要地域を漏れなく焼き尽くし破壊し尽くし、しかも必要な地域は残すという困難な作戦を成功させるには、レーダの精度が低かつた当時としては、確実に攻撃目標を識別できる昼間で、そのためにも中高度からの爆撃を採用したのであろう。日本の防空体制の弱体化を認識してゐたことも理由の一つであつたと考へる。その後の重要な作戦、例えば広島、長崎への原爆投下も目視爆撃が絶対条件であつた。このことは昭和20年8月9日、雲に覆われて目視できなかつた九州小倉を避けて、原爆搭載機エノラ・ゲイが長崎に向かつたことに

も示されている。

米軍の日本打倒計画には本土進攻作戦、原爆および戦略爆撃による焦土化作戦が選択肢としてあり、これらの作戦が随時、取捨選択あるいは組み合わせられて実施された。横浜は東京、広島、小倉、京都、新潟、長崎など主要都市の一つとして、カーチス・ルメイの元で原爆投下目標地の候補に挙げられ、東京が3月10日の大空襲により壊滅状態になった後に開かれた攻撃目標委員会、京都、広島に続く第三の候補地になった。最終的に横浜が原爆投下目標から外されたのは5月28日で、その翌日直ちに『横浜大空襲』が実施された。

カーチス・ルメイは日本焦土化作戦の立案者・指揮者であり、3月10日未明の『東京大空襲』もルメイの作戦・指揮によるものであった。これが焼夷弾による都市爆撃へと作戦変更された最初の本格的実施であった。彼は前任者ハンセルが主張する軍事的に必要な個所だけをたたきという「ピンポイント精密爆撃」を手ぬるいと考え、ハンセルが左遷されるとすぐさま軍需工場、民間住宅地の別なく徹底的に破壊し焼き尽くす「無差別じゅうたん爆撃」を主張し実行した。

ルメイは南北戦争で南部諸州を壊滅させた悪名高い英雄にして、人種差別主義者であったウィリアム・シャーマン将軍の再来とも言われた。空襲についてルメイが部下にくだした訓示は「我々の爆撃下で、瓦礫に押しつぶされ炎につつまれて『ママ・ママ』と泣き叫ぶ3歳の少女の視線を思い浮かべるようでは、国家が君たちに要求する任務を全うできない。そんなものは忘れてしまえ」というものであった。彼は『鬼畜ルメイ』『皆殺しルメイ』『近代的ネロ』と渾名され恐れられた。部下のパイロットに執拗に超低空飛行を指示した。『低く飛べ、低く飛べ』が彼の口癖であった。だから、機銃掃射にあった被災者は「操縦席に座る飛行士の顔を間近かに見た」という証言が多い。

「民間人攻撃は、国際法違反」の声にルメイは「民間人居住区で軍需品を作っている日本人への攻撃こそ、戦略上重要である」と押し切り、ベトナム戦争では「(北)ベトナムを石器時代に突き落としてやる」と豪語し、北爆を推進した。

昭和39年(1964)そんな彼に日本政府は航空自衛隊の創設指導に貢献があったとして、勲一等旭日大綬章を与えている。ルメイの叙勲に奔走したのは参議院議員で元航空幕僚長・特攻作戦起案者であった源田 実、小泉純

一郎の父 自民党代議士・元防衛庁長官小泉純也が、同調して実現したものである。源田はこれに先立ってアメリカから「勲功章」を授与されている。ここに「真珠湾攻撃」と「日本本土空襲」の責任者の相互免責をはかるバーター取引の意図があった。

源田 実ほど戦中の評価と戦後のそれとが激変した人物も珍しい。源田は、山本五十六元帥の信頼が厚く「真珠湾攻撃」に航空参謀として作戦指揮した。現在の「ブルーインパルス」の源流である「源田サーカス」で有名である。しかし、これは見世物としての曲芸飛行であり、彼は戦闘機乗りとしての実戦体験は皆無であった。猛禽類を思わせる眼光炯々とした鋭い目つき、堀の深い端正な風貌、鋭い舌鋒と明快な語り口には、近づく者を威圧せずにはおかないカリスマ性があった。異論は一切認めない強引な性格で、ハイリスク作戦を好んで立案した。特攻隊を編成しようとした時、部下から「ならばご自身で出撃されては如何か」と詰め寄られ、顔面蒼白となって絶句したというエピソードが残っており、戦後の慰霊祭で、特攻遺族に詰め寄られ責任を追及されている。自身の操縦技術に絶対の自信を持ち防弾装備を嫌い、人命防護の装備が提案されると「腕よりも機械に頼る腰抜けどもを増やすだけだ」と一蹴している。また 戦後反社会的集団である暴力団 I 会系右翼団体を公然と支持するなど、暴力団と癒着し政治家としても否定的評価を受けている。

昭和天皇はルメイへの直接勲章授与を拒否している。勲一等旭日大綬章は、「天皇親授」が本来である。昭和天皇は『東京大空襲』後の3月18日、軍上層部の反対を押し切って、最も被災の大きかった深川地区を中心に被災現場と罹災者の状況をつぶさに視察一巡された後、同行した藤田侍従長に「関東大震災の時に比べ、今回は一段と胸が痛む。これで東京も焦土になったね」と語ったという。この視察が戦争終結への天皇の決意を一段と強めると共に『無辜の臣民への虐殺』に天皇の激しい憤りが直接叙勲拒否という前例のない行動に現われたものと思う。

勲章授与は憲法第七条七項に定める「栄典を授与すること」に該当し、第四条の「天皇の国事行為」のひとつである。また 第三条で国事行為は「内閣の助言と承認」を必要とすることになっている。私は浅学にして憲法に詳しくないので言明はできないが、一般的に「内閣の助言」を象徴天皇が拒絶することはあり得ないと思う。現に私の調べた限りの憲法解説書は、天皇が拒絶した場合を想定していない。だから、拒絶したことが直ちに憲法違反になるかどうかははっきりしない。しかし、仮に憲法違反と解釈されたとして

も、私は天皇のルメイに対するこの行為に喝采を送りたい。

ルメイも源田も過去の人になった今、私もこれ以上死者に鞭打つことはやめにする。



(写真 3月18日深川を視察する昭和天皇 出典：平野証緒『米軍が記録した日本空襲』草思社)

当時、横浜は東京、大阪、名古屋、神戸に次ぐ第5の都市であった。原爆投下基準から、最有力候補地のAAとされたのが京都と広島、次のAランクが横浜と小倉であった。つまり、横浜は京都、広島に次いで一旦、三番目の原爆投下候補地になったが、投下選定基準の第三の要件である「8月までに空襲で破壊されていない都市」の条件を満たしていず、5月29日の『大空襲』で市の主要部分が破壊されたので、もはや原爆を投下するに値しない都市と判定され、原爆による効果が正確に把握できないから外されたものであろう。

その2に続く